

《移転のメディア》としての衣服

—日本の近代化における洋服—

城 野 充

Transferring Modernity Mediated by Clothes:
European style clothes in the Japanese Modernization

Mitsuru JOHNNO

はじめに

本稿は明治以降の日本の洋装化を「近代の移転」という点から論じようとするものである。衣服のグローバル・ヒストリーをヨーロッパ式衣服の全世界的支配の過程として描いたロバート・ロス¹は、公式の植民地化を免れた地域での国家指導者のイニシアティブによる「上からの洋装化」の例として、18世紀のロシア、20世紀のトルコ、イラン、そして明治以降の日本をとりあげている¹。これらの国々の洋装化に共通しているのは、国の近代化のために指導者が「自発的」に洋服を導入していることだ。近代化のための洋服着用とはいったい何を意味しているのだろうか。近代化路線において、洋服は非西洋のこれらの国々にいかなる「近代」をもたらしたのだろうか。小論ではこのことについて幕末の1850年代から1920年にかけての日本の近代化の文脈で考察していくこととする。

献上された近代

洋服は大型蒸気船、そして電信や蒸気機関車とセットで日本に入ってきた。まずはこのことを確認しておこう。日本における洋装化の第一歩は、あくまでも近代の圧倒的な物質的・科学的優位を大型蒸気船や電信、蒸気機関車で示した西洋近代の人間が着用している服装として一国のリーダーたちが受容、模倣したものとして始まったのであり、けっして「ファッション」のバリ

1 ロバート・ロス（平田雅博訳）『洋服を着る近代』法政大学出版会、2016年、14頁

エーションとして加えられたのではない。このときの洋服着用にはそれを目にする他者へのホスピタリティというものは不在であったと言える。日本での洋装化はすぐれて政治の問題としてスタートしたのだった。

洋服を着た日本人男性を猿のようだと酷評したのは、西南戦争の翌年、1878年にシティ・オブ・トキヨー丸で日本の地を踏んだイギリス人旅行作家、イザベラ・バードである。彼女は、その一方で、和服姿の日本人を恰幅がよく、堂々としていると好感をもって眺めている。なんでも、和服は日本人の貧弱な体型を隠してくれるからだという²。バードが目にした東京は、新旧のものが対照的にひしめき合い、天皇、閣僚、軍将兵、公務員、警官のみならず、「若き日本」の象徴たろうとする遊び人ふうな若者たちも洋服を着るようになっている街であった³。

上からの「服制改革」としてスタートした日本における洋装化は、1853年に4隻の軍艦でマッシュ・ペリー提督が浦賀へ来航したことに端を発するウエスタン・インパクトによってもたらされたものである。翌1854年に再来航したペリーたちの横浜への上陸に際しては、過度の人的接触を日本側が警戒していたにもかかわらず、物資の運搬等を通じて、アメリカの士官、水兵、海兵隊と日本の高官、役人、労働者は連日交流することになる。ペリーによれば、日本人の好奇心は異常なほどで、士官や水兵につきまとい、衣服をさわり、事細かく調べ、とくにボタンに執着したという⁴。

陸揚げの後、デモンストレーションされた電信、小型蒸気機関車に驚いた日本人。貰った衣服のボタンを宝物のようにしまい込んだ日本人。「合衆国からもたらされた珍しい織物、機械装置、精巧かつ新奇な発明品の数々」がセッティングされた横浜港の一角は、規模は非常に小さいながらも「モダン（近代）の展示会」の様相を呈していたことが想像できる。西欧で生まれた近代がアメリカを経由し日本への「贈り物」として届けられたのは、1854年3月13日のことであった。

「ハイブリッドモダニティ論」の展開において近代西欧の「普遍的妥当性」を「移転可能性」という概念によってとらえようとしたのが社会学者の厚東洋輔である。厚東は「移転可能性」とは「ある文化項目が、異なった社会的・文化的コンテクストに移し替えられても本来の活動水準が損なわれることなく作動する力」という概念であると定義し⁵、そのうえで、「移転可能」は「普遍妥当」の必要条件であるとする。「移転可能性」はモダンが規格化することによってその可能水準が向上していくのである。厚東は19世紀半ばは西欧生まれのモダンが「規格化」（標準化）へと向かう画期であったとするのであるが、まさにこの時期に「規格化され、ユニット化され、

2 イザベラ・バード（時岡敬子訳）『イザベラ・バードの日本紀行』講談社学術文庫、2011年、55、56、92、93、370頁

3 同上書、111頁

4 M・C・ペリー（宮崎壽子監訳）『ペリー提督日本遠征記（下）』角川ソフィア文庫、2016年、193-194頁

5 厚東洋輔『モダニティの社会学』ミネルヴァ書房、2006年、111-112頁

持ち運びに便利なモダン」⁶ がペリーによって日本に運び込まれたのである。

アメリカから日本への「近代という贈り物が展示された会場」に足を踏み入れることのできた日本人は限定的なものであったとはいえ、「モダン移転のメディア」(厚東)としての電信装置、蒸気機関車等を通じて西洋文明＝近代に間近で接触することのできた時空が横浜に出現したのだった。ここで述べておく必要があるのは、「移転のメディア」としての電信装置、蒸気機関車に媒介された西洋文明＝近代はテクノロジーと結びついた sciences であったということである⁷。社会学者・正村俊之は、人間の身体機能の拡張としてのメディアという M・マクルーハンの言説に依拠して、身体機能を拡張しながらヒト・モノ・カネの流れを媒介する点でメディア的機能を果たしている輸送手段(鉄道、大型蒸気船)や通信手段(電信)の発明をメディア革命ととらえる⁸。このようにみると、最先端のテクノロジーと結合した sciences の結晶であった「大型蒸気船」で訪日し、「電信機器」と「小型蒸気機関車」を献上したことでのウエスタン・インパクトの程度はいかに大きいものであったかがうかがえる。いま一度、厚東を引くことにしたい。「科学は非西欧圏の近代化にとって決定的に重要である。というのは、科学こそが、非西欧文化圏に移し替えても立ち腐れることのないモダニティの筆頭と考えられるからである」⁹。

日本における「上からの洋装化」はこの文脈と切り離して考えることはできない。明治の指導者たちが導入しようとしたのは上にみたテクノロジーと結びついた sciences をもつ文明国に共通する衣装の様式であり、単なる衣装の一様式としての洋服ではない。彼らにとって洋服の袖を通すことは、近代＝ sciences に通じていくことであったのだ。sciences は合理性を基礎として成立していることは言うまでもない。

アメリカから「近代を献上」されて約四半世紀、長崎からロシアのウラジオストクに敷設された海底ケーブルによってヨーロッパ、アメリカと電信で結ばれ(1871年)、新橋～横浜間(1872年)、大阪～神戸間(1874年)には蒸気機関車が走行し、洋服姿は東京にとどまらず、秋田や山形などの都市においてもみられるようになった。近代の移植という「文明開花」の道をひた走る、そうした日本をバードは旅行したのであった。

6 厚東洋輔『グローバリゼーション・インパクト』ミネルヴァ書房、2011年、38頁

7 UTSUMI Hirofumi and TAKAZAKURA Yoshinobu, Dreams of the vanquished: narratives of computers in post-war Japan, Dick van Lente ed., *Prophets of computing: visions of society transformed by computing*, ACM publishers, 2020 (forthcoming)

8 正村俊之『グローバリゼーション』有斐閣、2009年、57頁

9 厚東前掲『モダニティの社会学』73頁

自分たちは近代的である

「統一性 uniformity」を軸に 1780 年から 1914 年にかけてのグローバル・ヒストリーを論じた『近代世界への誕生』で C・A・ベイリは、近代的 modern であることの要点は「自分たちが近代的であると見なすこと」だとの考えに立って、「近代性 modernity とは「時代に遅れない」よう強く願望を抱くことである。それは模倣と借用の過程であった」との見解を示している¹⁰。このベイリの見解は、非西洋地域にとってのウェスタン・インパクトへの対応を考えるに際しての核心部分と言ってもよい。幕末から明治にかけての日本をつき動かしたのも、まさにベイリの言う、この「自分たちが近代的であるとみなすこと」、そして「時代に遅れてはならないと強く願望する」という「近代性」であった。

明治維新のリーダーたちにとって、まず必要と考えたのはこの「自分たちが近代的であるとみなすこと」であり、その重要な手段が洋服の着用であった。模倣、借用としての洋装化である。「上からの洋装化」は国際社会にあって列強諸国に対し対等性を示すためといった点とあわせて、みずからを近代的な存在であるとみなすため、つまり新たなアイデンティティ、すなわち「近代的である」というアイデンティティ獲得のためのものという点も強調しておく必要があるだろう。このように考えると、たとえ洋服姿を「まるで猿だ」と欧米人に思われようが¹¹、天皇以下公職にあるものは公の場ではすべからず洋装すべしとの明治政府の方針はより一層理解できる。まずもって必要であったのは、「自分たちが近代的であるとみなす」ことであったからである。

さらにこのことを「変身」から考えてみよう。ここでの「変身」とは衣服を変えることによる「変身」である。「若き日本」は着物から洋服へと衣服を変えることによって、それまでの自己から離脱し、近代的意識と力が漲る近代人へと「変身」しようとしたとも言える。1871 年の天皇による「服制改革内勅」（華族が対象）にある「豈一日モ軟弱ヲ以テ天下ニ示ス可ケンヤ」とのくだりは、衣冠を纏う軟弱な自己からの離脱という「変身」宣言そのものであった¹²。そして、それはまた、和装を軟弱なものとする「まなざし」の誕生の瞬間でもあったのである。

こうした衣服を変えるということに関して、柏木博は「新しい自身の存在（アイデンティティ）をつくろうとしているにせよ、あるいは自らの存在とは異なったものとして装おう（変身しよう）

10 C.A. ベイリ（平田雅博、吉田正広、細川道久訳）『近代世界の誕生（上）』名古屋大学出版会、2018 年、15 頁 Bayly, C.A., *The Birth of the Modern World 1780-1914* (Blackwell, 2004/2017) p.10

11 日本人の洋装を酷評したのはイザベラ・バードだけでない。お雇い外国人のフォン・モールも同様であった。O・フォン・モール（金森誠也訳）『ドイツ貴族の明治宮廷記』講談社学術文庫、2011 年

12 明治天皇の名による内勅ではあるが、明治政府の意向に沿ったものである。天皇は西洋的であることを決して好んではいなかった。このことについては、坂本一登『伊藤博文と明治国家形成』講談社学術文庫、2011 年、さらには若桑みどり『皇后の肖像』筑摩書房、2001 年において詳述されている。

としているにしろ、いずれにせよ、それまでの自身とは異なった自己をそこに出現させる試みであることには変わりはない」と述べている¹³。

また、卑近な例で言えば、京都のある僧侶が、「袈裟」「道服」「白衣」を着るとウルトラマンのように変身でき、パワーアップした自分になれる、と服装のもつ不思議な力を語っている¹⁴。この服装の力を明治のリーダーたちも信じたのであった。

ロスも同様に、ロシアやトルコ、イラン、そして強制度は低い日本における「上からの洋装化」の前提となっていたのは、「衣服を着替えて外見を改めれば、心のありようも改められる」との考えであったと、後発国の近代化路線における衣服改革に通底する「近代のアイデンティの創出」と「近代への変身」に言及する¹⁵。

宮中の「服制改革内勅」に続いて、1872年には太政官布告「大礼服通常礼服の制定」が発布され、文官と非役有位者の通常礼服は燕尾服と定められた。またこの年には鉄道職員に対して制服が、1874年には軍人の制服および警察官の制服が制定された。さらに、1876年には、文官の通常服をフロックコートとする布告が、そして1887年、女性の洋服を奨励した「婦女服制の思召書」が皇后によって出されるに至る。これら一連の洋装化の流れはよく知られるところだ。

このように、天皇による「服制改革内勅」から皇后の「思召書」まで16年の歳月が流れていたわけであるが、若桑みどりはこの「思召書」の意図するところは女性の国民化をめざしたところにあると論じている。若桑によれば、天皇の洋装は男性の国民化のために、皇后の洋装は女性の国民化のために不可欠なものであった¹⁶。ベネディクト・アンダーソンが「国語」＝「出版語」が「国民」を創ったとするように¹⁷、日本の近代化はその端緒において、洋服によって「日本国民」を創っていったということが言えるだろう。このとき、軍服はもちろんのこと、上級官吏のフロックコート、学生や看護婦の制服は、「出版語」の役割を果たしていたのである。洋服による日本国民化は「脱亜入欧」を象徴的に語るものであろう。

この近代国家の「国民」について、渡辺京二は近世国家と近代国家の決定的な相違は、近世に生きる人々は統治者以外は、国家的大事にかかわる必要がなく、不本意にもそうせざるを得ないときは天災のごとくやりすごすことができたのに対して、近代国家の国民は国家的大事に有責として自覚的にかかわることが要求された点にあるとする¹⁸。このことについて渡辺は1864年の下関戦争（馬関戦争）に際し、列強の軍隊の弾薬運びに協力し、それが売国の所業であることを

13 柏木博『ファッションの20世紀』NHK ブックス、1998年、16頁

14 鷺田清一『着飾る自分、質素な自分』KTC 中央出版、2004年、132頁

15 ロス前掲書、14頁

16 若桑みどり『皇后の肖像』筑摩書房、2001年、253-262頁

17 ベネディクト・アンダーソン（白石さや、白石隆訳）『増補 想像の共同体』NTT 出版、1997年、76～87頁

18 渡辺京二『幻影の明治』平凡社、2014年、96-97頁

自覚していなかった日本人と 1904 年の旅順包囲戦で屍の山を築きながらも何度も突撃した「日本国民」をエピソードとして語っている¹⁹。

もちこまれた「近代のまなざし」

皇后の「思召書」で注目すべきは、ここにきて、立位での動きやすさといった機能性の点で洋装を奨励している点である。もちろん、市井に生きる女性にとっては高価な洋装のもつ動きやすさを説かれても実感のない縁遠いものであったであろうし、日常生活にあっては女性も男性も必要に応じて、例えば襷掛けやその他の様々な工夫をしてきたのである。そうしたなか、「文明開化の、さしあたっての必要の枠の外に置かれていた女性については、着なれた和服を洋服にしなければならない理由もなかった」²⁰。例えば、後に機能主義の点から集中砲火を浴びることとなった女性の帯について言えば、その締める高さは幕末の下町風はほとんど腰骨の上であったようである。それが 20 世紀になると高くなり、1930 年代の娘風はときに乳房を圧するほどになっていたらしい²¹。また度々指摘される歩行時の裾の問題もナンバ歩きでは乱れることはなかったようである²²。

とはいえ、「機能性」という視点が服装選択の問題に登場してきたその意味は小さいものではない。なぜなら、その後の「洋服か和服か」という服装選択をめぐる言説の多くはこの「機能性」「合理性」を軸として展開されるようになったからである。ここで留意すべきは、明治初期の洋装化への動きはなにも洋服が機能的であったからの導入ではないということである。繰り返しになるが、「上からの洋装化」は、テクノロジーと結合した sciences をもつ列強諸国の服装の模倣という象徴的な面からスタートしたのであり、和服の「不便」は洋服の導入後に事後的につくられていったものである²³。

哲学者の鷺田清一は、衣服というものを考えるにあたり機能主義から離れる必要があると言う²⁴。鷺田と同じように、機能性、合理性からはなぜ人は衣服を着るのかということには迫っていけないとの立場をとる者として、建築家のバーナード・ルドフスキー、社会学者の多田道太郎、さらには身体論を中心に評論活動を展開した三浦雅士の名を挙げることができるだろう。鷺田は

19 渡辺前掲書、97、104 頁

20 大丸弘、高橋晴子『日本人のすがたと暮らし』三元社、2016 年、309 頁

21 高橋晴子『近代日本の身装文化』三元社、2005 年、290 頁

22 この事実は NHK「偉人たちの健康診断」（2019 年 10 月 3 日 BS プレミア放映）で知った。

23 洋服の「便利」、和服の「不便」については、城野充「キモノへの《まなざし》の誕生 ―近代的身体と「不便」の発見」（『追手門学院大学国際教養学部紀要第 12 号』2019 年）

24 鷺田清一「モードの狡智」（鷺田清一、黒田日出男、保立道久、板谷徹、外間守善、深作光貞、日高敏隆『顕わすボディ / 隠すボディ』ポーラ文化研究所、1993 年）16 頁

現代の衣服には機能面で説明できるものよりもできないものの方が多いのではないかとし、例としてネクタイや夏場のストッキングを挙げて、それらの「反機能性」を指摘する²⁵。ルドフスキーは、人間が自分の身体を侵犯したいという執念は、なぜ人間が服を着るのかという非合理性を理解させるのに役立つと着文化の非合理性を指摘している²⁶。多田は次のように言う。和服を着ない理由を問われ「不便だから」という答えは上すべりだ。その証拠に、足をおかしなかたちにしめつけているのに靴を履いているのは機能主義重視ではないのではないかと²⁷。最後の三浦は、起源的にも衣服の目的は着やすく動きやすいということにはなく、もしそうであれば裸体がもっとも動きやすいので衣服は必要ではなかったはずだと、機能主義的観点から衣装をみることを喝破する²⁸。これらに共通しているのは着文化の反機能性、非合理性である。

しかし、「思召書」で示されるところとなった「機能主義からのまなざし」は「近代的価値のまなざし」として、1900年代初頭の女学生の服装に関する議論、さらに1920年代の成人女性にとっての服装論争へと受け継がれていくことになる。ここにおいて重要であると思われるのは、この二つの論争にあって「洋装擁護派」、「和服擁護派」、双方互いに「近代的価値」を受容したうえでの議論が展開されていたという点である。アンドレー・ゴードンは1920年代の服装論争は、「効率、経済性、利便性が規律の枠組内での自由、快楽か」という近代生活の諸価値を基層としたものであったと言う²⁹。

機能主義から衣服をとらえようとする「まなざし」をさらに考えるにあたって、ここで幸田文の自伝的小説『きもの』の冒頭部分を取りあげてみるのも無駄ではないだろう。

引き千切られた片袖がまんなかになんか置かれ、祖母と母とるつ子が三角形にすわっていた。るつ子が叱られているのだった。

(略) 今朝、学校へいく前に、着たままで、右手で左袖を力任せに千切って、肩かごへ突込んでおいたのが、早くももう見付けられ、帰る早々にそこへ引き据えられたのだった。

なぜこんなとんでもない乱暴をしたか、責められた。綿入れの筒袖胴着は肩のところがはばたくて嫌なのだ、といっても大人たちにはそれがわからないらしく、そんなことはないと不承知だった。新しい綿だからふくふくと軽くしなやかで、幅ったくなどない、おまえは口から出まかせの申しわけをする、という。それなら母さんも手を上へあげる体操してみなさいよ、肩のところへ袖がかたまって、とても真っすぐになんか手があがらないからと腹を

25 鷺田清一『ひとはなぜ服を着るのか』NHK出版、1998年、16-17頁

26 バーナード・ルドフスキー（加藤秀俊、多田道太郎訳）『みっともない人体』鹿島出版会、1979年、156頁

27 多田道太郎「みっともないファッション」（多田道太郎編『着る』平凡社、1980年）150頁

28 三浦雅士『身体の零度』講談社選書メチエ、1994年、204頁

29 アンドルー・ゴードン（大島かおり訳）『ミシンと日本の近代』みすず書房、2013年、127-127頁

たてると、今度はもう片袖はどこへ捨てた、と追及される。(…)³⁰

しばらく読みすすめると、「学校は一級みな明治 37 年生まれ」というくだりに出会うので、冒頭のシーンは、おそらく、明治 37 年（1904 年）生まれの幸田自身の体験をもとに描かれていると思われる。それはさておき、ここから読み取ることのできるのは、学校での体操と着物の相性に関することがらである。体操の求める身体運動の意味するところは「近代的身體」＝「軍事的・産業的身體」の創出である。日常での身体所作にはあまりみられることのない体操の身体運動が、『きもの』の主人公のつ子のように、学校に通う子どもたちに着物の「不便」を発見させていったのである。

ここでの注目点は、日本女性の洋装化における学校の果たした役割である。体操、スポーツの要求する身体運動を通じて発見された着物の「不便」は女袴やセーラー服の採用へと至らせた。『近代日本の身装文化』の著者、高橋晴子によれば、近代日本の服装改良、洋装化の尖兵だったのが女学生であり、彼女たちの 5 年間の学校における洋服生活が大衆洋装への流路となっていた³¹。またアンドルー・ゴードンの「成人女性が西洋式のブラウスとスカートを身につけるようになる何十年もまえから、女生徒は多数が西洋ふうの「セーラー」型制服を着はじめていた」³²との記述は、高橋の言う「洋装化の尖兵」と重なるものであり、当時彼女たちはまさに「ファッション・リーダー」であったのだ。

ここで女学校という枠にとどまらず、国民皆学のもと近代的学校制度下に設置された学校という、より大きな枠で論をすすめていくことにする。この学校において、リテラシーや科学的思考の習得、そして上にみた体操、スポーツを通じての近代的身體の創出、学校の種別によっては制服着用といったことに加えて、洋風の建物での机と椅子での生活³³、さらには時計の時間による生活がなされていたことにも着目すべきだろう。学校こそが近代的価値、規範を複合的に内面化させる重要な契機となる場であった。ロスの言うところの、「身体を覆うための規範は長期的には内面化される必要」³⁴とはこのことなのである。

関連して、「机と椅子」での生活にも言及しよう。すでにみたように、1920 年代は「近代的価値」という枠組みでものごとをとらえようとする「まなざし」が普及しはじめた時期であった。ちょうどその時期に、衣食住など生活全般の改善をめざす、文部省の外郭団体である「生活改善同盟」

30 幸田文『きもの』新潮文庫、1996 年、5-6 頁

31 高橋晴子『近代日本の身装文化』三元社、2005 年、282 頁

32 ゴードン前掲書、124 頁

33 バード前掲書、371 頁 バードが訪れた 1878 年の秋田の師範学校は洋風の建物で、学生は背のついた木製の椅子に座ってひとりずつの机に向かって授業を受けていたようである。また学校の備品はアメリカ式だったとも記している。

34 ロス前掲書、5-6 頁

が設立されている。柏木博は、1910年代末から20年代の日本では、新しい社会への期待をはらんだ「改善」「改良」「改造」という言葉がさかんに使われていたことに注目し、これらの概念が住宅や生活様式の欧米化への提言として具体化されていったことは日本の近代化に特有のことと指摘する³⁵。ここで再び、ベイリの「近代性 modernity とは「時代に遅れない」よう強く願望を抱くことである。それは模倣と借用の過程であった」という見解に立ち戻りたい。そうすると「改善」「改良」「改造」も近代性を表す言葉であることが理解でき、また、この生活改善同盟の小委員会「住宅改善調査委員会」が出した調査レポート（1924年）の「住宅は漸次椅子式に改めたい」という提案の意味するところも理解できる。提案の理由は、柏木の整理に従えば、1) 座式は行動上、機能的でない、2) 和洋ふたつの「二重生活」は非合理、ということである³⁶。ここでは1)への言及にとどめるが、椅子式生活によって求められているのもやはり「機能的身体（所作）＝近代的身体（所作）」であると言えるだろう。また、「公」（学校や企業）と「私」（住居）に一貫した「機能的身体（所作）」の創出を意図したものととらえることもできる³⁷。住宅、生活様式とは身体にかかわる様式なのである。そう考えると、住宅、生活様式の欧米化とは「自分たちが近代的であるとみなす」ため、そして「時代に遅れない」ために日本人の身体の欧米化（近代化）を志向したものだと言えるだろう。

しかし、機能的、合理的であることという規範の内面化は一朝一夕のもとに実現されるものではないし、それによる身体的慣習（生活様式）の変容もまた同様である。このあたりについては稿をあらためて論じることにはしたい。

洋装という記号 (むすびにかえて)

これまで述べてきたことは、洋服を着るということは、つまるところは「近代」を着るということである。「上からの洋装化」は、1) 欧米列強に対する対等性を示すものとして、2) 自分たちは近代的であるというアイデンティティを獲得するものとして、の二点で展開されてきたのであるが、その後の展開は2)の文脈で、洋服を纏う身体そのものに対して機能性を求めるものとなっていったのである。それはまた、着物などの和服に対する機能性からの「まなざし」の誕生でもあった。

ここにおいて浮上するのは、はたして洋服は当の西洋において「合理性」「機能性」の面で着

35 柏木前掲書、156-158頁

36 同上書、163頁

37 筆者の体験で言うなら、家に初めて椅子が入ったのは筆者のための「勉強机（学習机）」とセットであった。学校の求める身体文化に対応するためであったと記憶している。

られてきたものなのかという問いである。洋装＝合理的、機能的という「まなざし」は電信、蒸気機関車＝テクノロジーと結びついた sciences とのセットで洋服が入ってきたという経緯のなかで、日本人が抱いたものに過ぎないものではないのだろうか。それは、明治維新というコンテクストのもと、サンタグムとパラディグムのなかでの配置によって生成した共示義的な「まなざし」ではないのか。このとき、「洋服が機能的、合理的であるとみなす」という枠組が形成されたのである。

日本における「上からの洋装化」にあって、洋服は近代を「西」から「東」へと空間的に移転させるメディアとなった。それはまた、衣服に対して時間的なまなざし、すなわち、「洋服＝近代的（新しい、優れた）」／「和服（着物）＝封建的（古い、劣った）」といったものを付与するものでもあった。このまなざしの中で、和服となった着物は「伝統的なもの」へと衣替えすることを余儀なくされていくのである。